

Ⅱ 討論の広場 Ⅱ

## 中日の歴史問題に関する思考

——『二一世紀の東アジアと歴史問題』読後

臧 運 祐

### 一、歴史問題の出現と表現

私の古くからの友人である田中仁教授は、長期に渡って二〇世紀中国政治史を研究すると同時に、政治学者として二一世紀以来の東アジア地域における歴史問題に十分に関心を払ってきた。彼は二〇一五年度にワンアジア財団の資金援助の下、大阪大学法学部で特別講義を開設し、講師各位との共同研究の基礎の上に『二一世紀の東アジアと歴史問題—思索と対話のための政治史論』（京都、法律文化社、二〇一七年四月）を滞りなく出版し、本書の編者として総論を執筆した。筆者は幸いにも本書を精読することができ、読後に少し考えるところがあった。私自身が共同歴史研究に従事した経験から、中日間の歴史問題について以下に愚見を述べ、専門家各位と編者の率直なご教示を賜りたい。

中日両国は一衣帯水の隣国であり、古代にはかつて二〇〇〇年余りの友好の歴史があった。しかし一九世紀中頃から一九四五年までの近代中日関係は、曲折して複雑であると言え、特に二度の中日戦争（中国では一般的に「甲午戦争」「抗日戦争」と分けて呼称する）の影響が最も重い。その勝敗の結末は、それ以前の半世紀の平等・不平等をめぐる両国関係を逆転させた。

第二次世界大戦終結以後、中国国内の内戦と一九四九年以後の兩岸（中国大陆と台湾）の敵対的局面、および国際的冷戦と米日関係の制約によって、東京裁判等の戦後処理と過程を経たものの、中日両国間の戦争が残した負の遺産や歴史認識等の問題は、しかるべく真摯な、かつ徹底的な清算には未

だに至っていない。これは歴史問題を両国関係の発展に必然的に影響を与える客観的存在にさせている。<sup>(2)</sup>一九七〇年代になり、両国リーダーの高度に政治的な知恵によって中日両国に国交正常化が実現し、平和友好条約が締結され、中日関係の発展の新時期を切り開いた。

一九八〇年代以後、日本の歴史教科書改訂（一九八二）や首相の靖国神社参拝（一九八五）等の事件をめぐり、中日間に歴史問題が出現し始めた。しかし、中国等アジアの近隣諸国の反対の影響下で、日本政府は、歴史教科書問題に関する「近隣諸国条項」（一九八二）や慰安婦問題に関する「河野談話」（一九九三）を通して、とりわけ一九九五年に著名な「村山談話」を発表し、中日関係は冷戦終結後の二〇世紀末に至るまで比較的正常で平穏な発展を遂げた。

二一世紀の小泉純一郎首相の在任期間において、彼は「村山談話」を継承すると述べたといえ、毎年靖国神社に参拝したことは、中日関係に冷えないし水点の局面をもたらした。二〇一二年九月の安倍晋三首相による二回目の組閣以来、二〇一三年一月二六日の靖国神社参拝と二〇一五年八月に発表した歴史談話は、目下的中日関係の改善と戦略互惠関係の発展にとって重要な政治的障壁となっている。

以上から分かるとおり、中日の歴史問題は一九八〇年代に出現し、以後三〇年余りの展開を経験してきたが、それは現在に至るまで両国関係の正常で順調な発展を制約する重要な政治的要素となっており、両国の政治家と学界が高度に注目

する価値を有している。

実際、一九九〇年代以来、中日間の歴史問題は、国際政治や中日関係に関する学界や歴史家たちの注意と研究を引き起こしてきた。学者たちは異なる専門領域から分析と論証を行い、歴史問題を解決するいろいろな提言を行ってきた。

中日関係における歴史問題の表現について、中国の学者である歩平先生は一連の論著の中で以下のように指摘している。中日の歴史問題は現実において主に政治・感情・学術研究という、異なっているが相互に関係する三つのレベルにおいて反映されている。三つのレベルの問題はまるで交差する三つの円のようであり、完全に重なり合うことはないが、完全に分離しておらず、互いに交錯・影響し、非常に複雑な状態を呈している。また、この三つの異なるレベルに対して、歴史問題を解決する処方それぞれ提起している。<sup>(3)</sup>

日本の若い政治学者である服部龍二先生は、まず「田中上奏文」をもとに、戦前と戦後の日中両国の歴史認識問題を検討する。そして主体と媒体の相違に基づき、二一世紀の歴史問題を政策・イメージ・知識・教育・記憶・感情の六つのレベルに区分した。<sup>(4)</sup>この六つの区分は上に挙げた歩平先生の三つのレベルの区分とおおむね一致する。

歴史学者として三〇年のキャリアを有する日本の波多野澄雄先生は、その著作において集中的に一つの問題を考察した。それは、日本のような敗戦国が、様々な歴史認識と戦争観が共存し競争する前提において、戦争と植民地統治に端を発す

る「歴史問題」に如何に対応するかという問題である。<sup>(5)</sup>これは戦後から現在に至る日本の歴史認識問題の焦点の所在を示すものである。

中日学者の上述の見解を総合し参考にと、歴史問題における政治・感情・学術レベルにおいて現出している複雑な様相に対して、筆者は以下のように考えている。二一世紀の更に広大な未来に対し、知識人たる学者たちは、学術レベルにおいて中日の歴史問題の解決に尽力し、更に客観的で実証的な成果でその他二つのレベルの歴史問題の解決に影響を与え先導することこそ、その本分と責任であり、それはまさに「士は以て弘毅ならざるべからず。任重くして道遠し（士不可以不弘毅、任重而道远）」である。

この意義から言えば、田中仁教授らは歴史問題に関わる思考と対話のために、二一世紀東アジアの歴史問題に関する見解を政治史の系譜として広く読者に展開した。その現実的関心の学術的本意は敬服に値する。本書が出版されたことをまず祝賀したい。

## 二、学術レベルにおいて歴史問題を解決する方法について

中日歴史問題の学術的解決について、筆者は主に政治学と歴史学の二つの方法があると考えている。

政治学は主に国内政治と国際政治の二つのレベルに着目

し、歴史問題を政治過程の一環と見なす。周知の通り、一九八〇年代以来の中日間の歴史問題の発生と展開は、三〇年間の中日両国の国内政治の進展過程と不可分であり、当然ながら冷戦後期と冷戦後の東アジア地域ないし国際政治の変遷の産物でもある。中日の歴史問題がまず政治レベルで現れているため、我々はまず政治学の理論と方法によって考察しなければならない。

本書の第一編は、主に二〇世紀（中華民国、中華人民共和国時期）中国政治の発展過程における歴史の語りと現代中国の「平和共存」外交過程での「歴史の語り」を論述している。

第二編は、二〇世紀の東アジア世界に立脚し、日本を中心としてそのアジア「構想」過程における歴史認識問題に力点を置いて論述している。第三編は、東アジア共同研究と中国大陆、台湾地区と韓国の歴史認識問題をそれぞれ論述している。このような章節の構成と論述の順序は、編者が国内政治と国際（アジア）政治の分野から二一世紀の東アジアの発展と歴史問題を総合的に考察しようとしていることを体現しており、それは「思索と対話のための政治史論」の趣旨を形成している。

一人の歴史学者として、本書は十分な学術的意義を有しており、政治学の分野において東アジアの歴史問題を解決する有益な模索でもあると私は考えている。しかし同時に指摘しなければならないことは、本書の第二編において戦後日本のアジア構想を論述しているものの、二〇世紀の戦前・戦後か

ら出発し、近現代日本の国内政治の変遷過程を踏まえて日本国内の歴史認識問題を論述・分析する論考がないことが惜しまれる。

アジアの近代化と戦後東アジア経済の急成長の「先導者」としての近現代日本は、アジアの歴史問題の形成と発展に対する「元凶」であり、「張本人」でもあった。戦前日本で流行した「皇国史観」と戦後右翼勢力が喧伝する「大東亜戦争史観」が日本の戦争責任と歴史認識問題に対して及ぼす影響は、軽視できない。そしてこれらの歴史認識問題は、主に日本の国内政治の要素と過程の表れでもある。よって、二世紀の中国と日本ないし東アジアの歴史認識問題を探求する場合、もしも日本側の戦争観と歴史認識問題を論じないか、もしくはそれが不十分な場合、「真の認識」に到達することはできないのである。まして現在の日本の学界でのこの分野に関する論著は既に十分に豊富なものとなっており、くどくど述べるまでもない。

これ以外に、筆者がやはり強調したいのは、歴史問題を歴史学者に帰する必要性と歴史学の研究方法の特殊な意義である。なぜなら、もしも歴史の真相が不明で事実がはっきりしない場合、その他一切の解釈は、結局のところ生命力を持たない空虚なものとなるからである。

政治学が主に「なぜ」(why?) どのように(how?) というレベルで歴史問題を紐解くのと異なり、歴史学者は主に「何が」(what?) というレベルで歴史問題を紐解く。まず歴

史学は史料に依拠して史実を構築し、さらに史実を通して歴史観と歴史認識を形成し、これにより歴史問題上の「常識」「知識」を紐解き、そして歴史認識上の「良識」「共識」を形成するのである(許育銘、本書「総論」六頁)。

しかしここで強調する必要があるのは、学術レベルにおいて歴史学の方法によって歴史問題を紐解く場合、中国と日本の歴史学者の研究方法上の差異に特に注意しなければならないということである。この点について、両国の学界はそれぞれ意見が異なっている。今は亡き中日共同歴史研究の首席委員であった歩平先生はかつて以下のように述べた。

中国と日本の学術レベルでの対話は、両国の歴史学研究における使用資料や研究方法の差異、そして歴史体験の差異によって生み出される認識の差異の問題を解決した。

中国の歴史学界は、日本が発動した侵略戦争を研究する時、各歴史事件間の関連に比較的注目し、表面上は孤立したように見える現象の背後にあるものを掘り起こそうと努める。例えば日清・日露戦争から一九三二年の九一八事変への発展、あるいは一九三七年の盧溝橋事件が反映する日本の大陸政策である。一方、日本の歴史学者は、たとえ戦争の侵略性に同意しても、諸々の事件が発生した時の具体的な主観的・客観的原因を研究規範として重視する。例えば九一八事変における関東軍・軍部と日本政府の異なる態度や、盧溝橋事件勃発の偶発的要素等である。

実際、具体的な事件発生 of 偶然性と国家関係の行方の必然

性という角度から見た場合、独自性と共通性という歴史哲学のレベルから歴史問題を研究することは歴史学が追求する理想的なモデルである。異なる国家の学者はそれぞれ異なる側面を強調するが、歴史研究の科学性を重視しさえすれば、研究方法の差異は学術交流と綿密な意見交換を通して徐々に接近させることができるのである。この方面において、日本の学者は、一つ一つの具体的な事実に注目して研究することで発展の趨勢を見失いかねないという問題に気づいており、中国の学者も日本の中国侵略の計画性と一貫性を論証する証拠資料に対する詳細な実証研究が必要であることに注意を払い始めている。

### 三、歴史問題を解決する最良の経路 ——国際共同研究

歴史問題は決して東アジアの中日両国独自のものではない。第二次世界大戦終結以後、世界では多くの国や地域で様々な歴史問題が存在しており、それらの間でもこの問題を解決する経路や方法を模索していた。

一九五〇年代から、二度の世界大戦を経験したドイツとフランスとの間でヨーロッパの歴史教科書を共同で編纂する共同研究が始まり、二〇一〇年にヨーロッパに関する三冊の歴史教科書を完成させた。また、一九七〇年代から、ドイツとポーランドの間で共同歴史教科書の編集作業が進められてき

た。徐秀麗先生の研究では以下のように指摘している。ヨーロッパの歴史問題に関する経験は中日両国と類似性があり、マクロの認識と具体的な方策において歴史研究と教科書編纂の協力に有益な手本を提供することが出来る。しかし彼女は同時にこうも指摘している。中日の歴史問題には更に複雑な歴史と現実の原因があり、多くの方面においてヨーロッパの経験を模倣することはできない。中国と日本の歴史問題の解決には、それぞれが参加して創造性に溢れた研鑽が必要である。

これ以外に、バルカン半島の旧ユーゴスラビアを構成していた各共和国の間で、またパレスチナとイスラエルの歴史教師の間でも共同歴史教科書の編纂作業が行われてきた。

二一世紀に入ってから、東アジア世界の中日韓三国はヨーロッパの経験を手本として共同歴史研究を通して歴史問題を解決する各種の努力を行ってきた。

二〇〇二—二〇〇五年、日本と韓国の間で政府主導の共同歴史研究が行われ、二〇〇六年には第二期共同歴史研究が実施された。

ほぼ同時期の二〇〇六—二〇〇九年、中日両国政府による共同歴史研究は、二〇一四年一月に北京と東京で『中日共同歴史研究報告』（古代史巻、近代史巻）を出版した。

中日韓三国の政府による共同歴史研究と並行して、三国の民間の歴史学者と教育者は二〇〇二年から東アジアの近現代歴史教科書の共同編集作業を開始し、二〇〇五年に『東亜三



『国的近現代史』を出版した。さらに翌二〇〇六年以降も共同研究を継続し、二〇一三年には『跨越国境の東亜近現代史』(上、下)を出版した。<sup>(10)</sup>

二〇〇〇年にはアメリカと日本・中国の三国の学者を中心に中日戦争に関する国際共同研究プロジェクトが組織され、二〇〇二年にハーバード大学、二〇〇四年にハワイ、二〇〇六年に東京、二〇〇九年に重慶で四度の国際学術シンポジウムが開催され、その後、三国でそれぞれ会議論文集を出版した。<sup>(11)</sup>

ほぼこれと同時に、主に日本と中国の若い歴史学者の間で近現代中日関係史をめぐる対話と共同研究が行われ、三冊の会議論文集が出版された。<sup>(12)</sup>

中国大陆と台湾の歴史学者は、二〇一〇年から「兩岸新編中国近代史」の研究プロジェクトを進め、二〇一六年にその晚清卷、民国卷を出版した。<sup>(13)</sup> 中国大陆・台湾・香港・マカオの学者たちは中華民国史の個別テーマに関する共同研究を行い、二〇一五年に一八巻の著作を出版した。<sup>(14)</sup> これらのプロジェクトのなかで中国の学者たちは、抗日戦争に関わる歴史問題について論究している。

これらの二一世紀的状况は、東アジア世界において政府と民間の各種レベル、各種形式と内容の異なる共同研究を通して、歴史認識あるいは教科書や中日戦争等の歴史問題の分野において「同意はできないが理解できる」という寛容原則にもとづき、国や国境を越えた国際的な共通認識を徐々に構築

しつつあることを示している。この種の趨勢と潮流は、我々が大いに広める価値を有している。なぜならこれは学術レベルから中国と日本の歴史問題を解決する最も良い経路であるからであり、歴史の和解を徐々に実現し、未来において東アジア世界に人類の運命共同体を建設する有益な試みでもあるからである。

「路は漫漫と其れ修遠なり、吾將に上下して探し求める(路漫漫其修遠兮、吾將上下而求索)」。本書は、「天花板」(中国・南開大学、台湾・東華大学、日本・大阪大学)と韓国・ソウル大学の政治学者と歴史学者らによる長い年月をかけた共同研究の成果である。<sup>(15)</sup> その二一世紀にアジア共同体を構築するという目標のために、国際共同研究を通して学術で東アジアの歴史問題を解決するという精神は、とくに賞賛すべきものである。

註(1) 筆者は、甲午戦争以前の半世紀において中日関係は平等的競争の局面にあり、その後の半世紀は不平等の局面にあったとしている(拙文「甲午戦争与近代中日関係の転折」『歴史教学(高校版)』二〇一五年第八期)。

(2) 歩平「抗戦勝利後対日本の戦後処理与中日歴史問題」『歴史教学』二〇一六年第一期。

(3) 主要な代表作として、歩平「中日共同歴史研究中的理論与方法問題」『抗日戦争研究』二〇一一年第一期、「中日歴史問題の対話空間——關於中日歴史共同研究的思考」『世界歴史』

二〇一一年第六期、「再論中日共同歴史研究の空間」『社会科学戦線』二〇一五年第七期、歩平主編『中日歴史問題と中日関係』團結出版社、二〇一五年、がある。

(4) 服部龍二『日中歴史認識—「田中上奏文」をめぐる相剋』東京大学出版会、二〇一〇年。同『外交ドキュメント 歴史認識』岩波書店、二〇一五年。

(5) 波多野澄雄著、馬靜訳『国家と歴史—戦後日本の歴史問題』社会科学文献出版社、二〇一六年。

(6) (訳者注)「士人はおらから強くなければならない。任務は重たくて道は遠い」(金谷治訳注「論語」 岩波書店、一九九九年、一五六頁)。

(7) 歩平「重視兩個区別—關於中日歴史問題的研究方法」『安徽師範大学学报(人文社会科学版)』二〇一五年第四期。

(8) 徐秀麗「欧州経験対解決中日歴史問題の啓示と其局限」『抗日戦争研究』二〇〇九年第二期。

(9) 北京…社会科学文献出版社、東京…勉誠出版。

(10) 北京…社会科学文献出版社、二〇〇五年六月版、二〇一三年二月版。

(11) 中国側が出版した論文集は以下の通りである。楊天石・庄建平編『中日戦争国際共同研究之一—戦時中国各地区』、楊天石・臧運祜編『中日戦争国際共同研究之二—戰略与歴次戰役』、楊天石・黃道炫編『中日戦争国際共同研究之三—戦時中国的社会与文化』、楊天石・侯中軍編『中日戦争国際共同研究之四—戦時国際関係』、北京、社会科学文献出版社、二〇〇九年、二〇一一年版。

(12) 中国語版は以下の通りである。劉傑・川島真・楊大慶編『跨越国境的歷史認識—来自日本学者及海外中国学者的視角』、劉傑・川島真編『一九四五年的歷史認識—圍繞「終戰」的中

日對話嘗試』、劉傑・川島真編『対立与共存的歷史認識—日中関係一五〇年』社会科学文献出版社、二〇〇六年、二〇一〇年、二〇一五年版。

(13) 王健朗・黃克武編『兩岸新編中国近代史』晚清卷(上、下)、民国卷(上、下)、北京、社会科学文献出版社、二〇一六年。

(14) 張憲文、張玉法主編『中華民国專題史』(全一八卷) 南京大学出版社、二〇一五年三月版。

(15) (訳者注)「道は狭くて果てしなく長いけれども、限りなく真理を探索し続けよう。」中国戦国時代の楚の政治家・詩人であった屈原の代表的な長編詩「離騷」の第九七句。

(16) (訳者注) 国際セミナー「現代中国と東アジアの新環境」は、天津・南開大学歴史学院、花蓮・東華大学歴史学系、大阪大学・中国文化フォーラムの共同主催として二〇〇七年から毎年開催してきた。

(そう・うんこ、北京大学・歴史学系教授)  
(和田英男 訳)